

# ヒマラヤ

## No. 115

● 特集 ネパール・ヒマラヤの新解禁峰



1981 JUN

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

# 1982年ヒマラヤ登山学校隊員募集

## クン (7,077 m)

1980年登山学校は、20名中19名がケダルナート・ドーム(6,831m)に登頂するという成果をあげて帰国しました(本誌109号既報)。隊員の中にはすでにヒマラヤ、アンデス、アラスカ等における高所登山経験者から、国内の冬山すら未経験という人にいたるまで幅広い層が参加していました。H A Jでは経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとり安全確実な高所登山を指導しております。隊員はすべて、装備・食糧・梱包・輸送・渉外等の具体的な準備実務にも参画していただき、また国内での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般について体得することができます。次回には自ら遠征を行なえる人材を養成することが、この登山学校の主眼となっております。実際に、卒業生の中には自ら隊長となって隊を組織し、成功をおさめて帰ってくる意欲的な人もでてきております。

1982年度はカンミール・ヒマラヤの秀峰クン(7,077m)にて実施する予定でおります。ふるって御参加下さい。

### 実施要項

- 目的** ①クン(7,077m)登頂  
②高所登山の基礎修得
- 時期** 1982年7月末～8月末
- 負担金** 69万円(航空運賃の変動等により変わることもあります)
- 定員** 20名(申込順)  
インストラクター4名(医師含む)
- 申込み** 1981年11月末までに下記宛に申込みこと(資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
淀橋食料ビル506 日本ヒマラヤ協会

この登山隊の旅行手続は、(株)西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

### 表紙写真

チベット国境まであと50キロ余の街道で休んでいると、新雪に追われるように沢山の羊たちが南をめざして下って行く。一家総出で暖かい地方の草を求めて移動していくのだ。  
生れたばかりの子羊を両脇にかかえているのは主人らしい。(い)

## ヒマラヤ No.115

1. **ヒマラヤ放談** 越前谷 幸平

5. ヒマラヤニュース<地域・トピックス・インフォメーション・新刊>

8. カンチ通信 No.3 カンチ学術隊便り

10. **特集** ネパール・ヒマラヤの新解禁峰

18. **連載** ヒマラヤ閑話④ 水野 勉

20. トレッキング許可で登れる山⑨ <ピサン・ピーク> 神田 孝

23. ヒマラヤの図書紹介③

24. 事務局日誌・寸感

※インド・ヒマラヤの記録は都合により次号に掲載します。

# ヒマラヤ放談

クラーク博士以来のパイオニア・スピリットを今にうつぐ北の雄、北海道大学山岳部・山の会。寒冷と氷雪に対する豊富な経験、キャパシティの大きさ、民主と自発の気風は、独得のアカデミズムをともなってヒマラヤにおいても継続的にユニークな活動を展開してきた。

1982年には冬のダウラギリをめざすという。

常に新たな課題を求めて前進するその姿勢は、アルパイン・スタイルに代表されるアルピニズムとはまた異質である。今回は、伝統を誇る山の会にあって、若手の中核として新たな節目を築く牽引車ともいえる越前谷幸平氏に、北大の山を中心に語ってもらった。



越前谷 幸平

## ●自由なふんいき

—— おめずらしい苗字ですが(笑)お生れは。

越前谷 「えちぜんや」と読むんですよ。小樽の生れです。

—— 山はいつ頃から始めたのですか。

越前谷 小樽の桜陽高校の山岳部からです。北大は、医学部のため6年間やりまして、その間山岳部におりました。

—— ドクターなんですね。ご専門は何ですか。

越前谷 脳外科医です。小樽に勤めています。

—— これまでの海外遠征経歴は。

越前谷 1972年にマッキンレーに行ったのが最初です。その後、74年から75年にかけて冬のトリスル、78年にカラコルムに行き、79年にまたカラコルムのクンヤン・チッシュ北峰となっています。目下、82年のダウラギリの準備を進めております。

—— 北大山岳部は、ひじょうに自由なふんいきというか、おおらかな気風があるように感じられますが。

越前谷 そうですね。一般の大学山岳部とはかなり違うように思います。個人を大切にするというか、合宿も年1回しかやりません。ふだんは、部員どうしの個人レベルの山行を主体にしています。もちろん、それらの山行も部のリーダー会できち

んと審査されなければなりません。

—— 以前、北大山岳部の友人と一緒に沢に入ろうと計画したことがありましたけど承認されなかった(笑)。

越前谷 部員のレベルがその山行をするに足る力を持っているかどうか厳密に検討するわけです。

—— 低温研とかティーチスの会など、北大には登山の周辺というか、関連した施設、グループがあるようですが、それとのつながりは。

越前谷 ええ、山の会関係者にもそれらに属している人がたくさんおります。名古屋大などの氷河研究グループともつながってます。

—— それらは、山岳部や山の会の活動にとって大きな力ですね。

越前谷 そのとおりです。遠征の場合の先輩の方々のいろんな方面での力はひじょうに大きいですね。今回のバルンツェの冬期でも低温研施設での耐寒テストとかいろんなことがやられてます。

## ●チャムランは原点

—— 北大がヒマラヤをはじめたのはいつ頃からですか。

越前谷 戦前から研究が行われていたようです。千島やカラフトにも行ってましたし、海外をめざした歴史は古いですね。戦後は、昭和24年頃からです。25年に研究会を開いています。30年には

橋本誠二先生がマナスルに参加しています。

—— 最初はチャムランでしたね。

越前谷 1962年ですね。当時としては画期的な遠征じゃなかったかと思います。チャムランは人的にも、また、その他の面でも北大のヒマラヤの原点になっています。そのあとナラカン・カールが計画され、63年に実施しています。

—— 50周年記念誌を拝見しましたが、ダウラギリも計画したことがあったんですね。

越前谷 64年に計画したわけですが、ネパール政府の不許可で1年延期され、66年にダウラギリIVということでした。

—— たしかその頃大きな遭難がありましたね。

越前谷 札内川十ノ沢での6名の遭難です。カラコルムのパツラ計画もあり、偵察を69年に送ってますが翌年のOBの一部による大麻事件があって中止になってます。

—— その頃のパツラといえますとひじょうに早期ですね。

74年にトリスルの冬期初登をめざしましたね。私もちょうどジョシマートでお会いしましたけど。

越前谷 私の最初のヒマラヤです。この時はリシ・ガンガをダイレクトにつめたのですが積雪が多くポーター達がギブアップしたのです。シェルバも動きませんでした。ディブルゲータの下あたりまで行ったのですが、ポーターさえ動けばやれたと思いますけどね。

—— 冬のトリスルをどうして発想されたのですか。

越前谷 山岳部創立50周年にもあたったわけですから。記念として冬の8,000m峰に登ろうじゃないかということでアンナプルナI峰が検討されました。その準備としてガネッシュ・ヒマールのラクサン・カルポを計画したんですがネパール政府の登山禁止にひっかかりガルワールに転進したわけです。トリスルが登られたのはアルパイン・クラブ創立50年でしたし、また、人間が最初に登頂した7,000m峰でもあったので、冬期7,000m峰初登ということでした。

—— いろんな意味づけがあった(笑)。

## ●常に新たな課題を求めて

越前谷 山の会の姿勢というか、クラーク博士以来の伝統としてのパイオニア・スピリットだと思うんですけど、いつも何かの新しい課題の追求を考えてきたわけです。冬のヒマラヤの発想もそこにありました。しかし、トリスルが失敗したことによって冬の8,000m峰計画はしばらくストップしたわけです。

—— 今回のバルンツェの冬期登頂はどういう位置づけになりますか。

越前谷 つまり、やり残した冬の7,000という課題を解決して、もう一度冬の8,000という課題にとり組もうということになったわけです。目標はダウラギリI峰北東稜で、82年に計画しています。

—— すばらしいですね。さきほどの新しい課題の追求ということですが、同じ困難の追求ということでもアルパインスタイルや無酸素というようにいわゆる登攀の尖鋭的課題とは少し異なるようなニュアンスを感じるんですが。

越前谷 そうですね。メスナーが一人ですごい登り方をするとか、或いは無酸素で登るとか、壁をやるとかというようないわゆる尖鋭的な意味での冬の7,000、8,000をやりたいということではないんです。

自分たちの山登りとして何か面白いことをやりたい、また、寒いところで氷雪に親しんできたことから冬にやってみたいという発想もありましたし。

—— 北海道の風土というものもだいぶ影響しているわけですね。社会人の場合もアラスカ、ソ連とか、イメージとして北をめざすようなところがあるように思われますけど(笑)。

越前谷 影響してますね。アラスカなんかひじょうに近い感じがします。アラスカはよく行きますね。私も72年にマッキンレーに行ってますけど。

—— ヒマラヤというと南の感じがしますか(笑)。

越前谷 やはりちょっと異質な感じはしますね。

—— 冬の8,000をやったあとの課題ですが、すごい登攀をやるというような方向には行かないものですか。

越前谷 極言すれば、自分たちなりの登り方での新しい課題ということなんです。スーパーアルピニズム的なグループができていくということには仲

々ならないと思われますね。

—— 北大のやり方をお聞きしていると、何かしら京都大学の方法を連想するのですが。

越前谷 そうですね。共通点はかなりあるような気がします。人的にも交流がありますし、建学以来のバイオニアスピリットはまだ流れています。また、アカデミズムを尊ぶというか、山登りでも登るだけでなく何かをやるという気風がありますね。

ヒマラヤもそうです。登るだけじゃなく、地質とか氷河とか何かをやりますね。

### ● 永い歴史の中での節目

—— 永い山岳部、山の会の歴史の中で幾つかの節目があったと思うんですが、越前谷さんもその節目をつくる重要な役を果しているんじゃないでしょうか。

越前谷 とても、節目をつくるなんて(笑)、ヒマラヤを考えた場合、チャムランというのは大きな節目だったですね。その後に続いたのも含めて。私の場合は登り屋のグループもたくさんいたし、ヒマラヤに行きたいというのがいっぱいありましたから。そういう力が流れの中でインパクトとして大きく作用しているかもしれません。

—— 永い歴史の中では浮沈もありますね。

越前谷 大きな遭難があった後は徹底的な検討を含めてまた最初から築きあげねばならんですし。

—— OBの動きによって現役が刺激をうけるということがあるでしょうね。

越前谷 大きな流れとしてみた場合は現役へのインパクトもあるんでしょうけど。

すぐ、登り方まで変えてしまうというようなことにはならないですね。

—— チャムランからはじまって、幾度もやってきた遠征は一つの力として蓄積されているんでしょうね。

越前谷 それはあると思います。この前のバルンツェのときもチャムランの人達が半分以上事務局に入りましたし、何かあったらまとまるという力はありますね。

送り出しのシステムとしてもかなり完成したのになっていると思います。計画樹立、評議員会で

の検討、そこからの諮問、そして委員会、たとえばバルンツェ委員会というようなものの成立、事務局の設置、後援会の結成と資金調達というように多くの人が関与してきます。

### ● 医者からの立場から

—— 最近は“登る医者”が多くなったみたいですね(笑)。

越前谷 私も遠征に参加する時は、“登る隊員”のつもりで参加しています。

—— 人によっては“ドクター不要論”をぶつ方もおりますが(笑)。

—— マッキンレーでの経験ですが、ラッシュで登るものですからどうしても障害が出てくる、医学の心得がある人間が現場にいて意識障害を適格に判断したために事なきを得たことがあります。

—— アルパインスタイルで、あるいは無酸素でかなりの高度に突っこんでいくというやり方が行なわれていますけど。

越前谷 脳外科医としての目から見れば、脳細胞は大きなキャパシティを持っていますので、ダメージを受けているのはたしかと思われながらも症状として外部に出てきていないということはあるでしょうね。

おそらく元にもどらない脳細胞がずいぶんあるんじゃないかと思います。8,000に無酸素で登頂できる人もいるわけですが皆が同一条件ではないはずで。調べ尽せば表面には出てきていない何か大切な事があるような気がします。人間のある意味での耐性の限界に挑むということでは意味があるでしょうけど、それが最尖鋭の山登りの方法だと、洗練されたものだと見てしまうのはどうかと思いますね。

—— 越前谷さんのトレーニングはどうしてですか。

越前谷 最近は山に行く前だけで、特殊なことは全くやってません。ただ、年1回は自分として満足できる山をやろうと心がけています。

—— 長時間どうもありがとうございました。

(インタビュー・構成：稲田)

## 新刊図書一覽

- ①岩村忍、「暗殺者教団 — イスラム異端派の歴史 —」、リポレポート、1981・1、ii、228p、1,200円、(筑摩書房版の同名書の再版)。
- ②中国登山協会・監修、「中国の高峰」、東京新聞出版局/人民体育出版社、1981・1、和文 = 151p、英文 = 45p、2,000円。
- ③植村直己、「男にとって冒険とは何か — 植村直己対談・エッセイ集 —」、潮出版社、1981・2、238p、980円。
- ④加納一郎、「山・雪・森 — 霧藻庵雑記 —」岳(ヌプリ)書房、1981・1、iv+282p、1,700円。
- ⑤亀尾進、「魔のシッタン河」、旺史社、1980・12、279p、1,200円、(「無名戦士の記録シリーズ」)。
- ⑥福谷正典、「破れ狼 — ビルマ最前線(2) —」叢文社、1981・1、372p、1,600円。
- ⑦日本ヴェーダーンタ協会・訳、「ラーマクリシュナの生涯」、日本ヴェーダーンタ協会、1981・2、328p、1,600円。
- ⑧山学同志会カンチェンジュンガ登山隊・編、「カンチェンジュンガ8598 — カンチェンジュンガ北壁無酸素登頂の記録1980」、山学同志会、1980・9、122p、1,500円。
- ⑨芳野満彦、「新編・山靴の音」、中央公論社、1981・2、265p、360円、(「中公文庫」M146)。
- ⑩辛島昇・坂田貞二他著、「インド」、実業之日本社、1981・2、393p、1,200円、(「ブルーガイド海外版28」)。
- ⑪E・プシュバダース・編/佐藤房吉・訳、「インディラ・ガンディー — 私の真実・自伝的回想 —」、評論社、1981・、(「評論社の現代選書34」)。
- ⑫高橋順次郎・監修、「ウバニャッド全書 — (附)印度古聖歌 —」、東方出版、1980・、全十巻、揃価64,000円、(大正年間出版の復刻版)。
- ⑬ニザーミー著/岡田恵美子・訳、「ライラとマジヌーン」、平凡社、1981・2、vi+207p、1,200円、(「東洋文庫」394巻)。
- ⑭護雅天・監修/並河萬里・写真、「トブカビ宮殿博物館全集」、同全集刊行会、1981・、全5巻、138,000円、(同刊行会=東京都千代田区神田小川町1~11、DMSビル)。
- ⑮升本順子、「シルクロードの女たち」、榊新進(名古屋)、1981・2、182p、980円。
- ⑯池上正治・編、「中国旅行全書」、刊々堂出版社、1980・6、424p、3,800円。
- ⑰今井通子、「縦走 — ダウラギリII・III・V峰 —」朝日新聞社、1981・2、237p、980円。
- ⑱河崎珪一・監修/堀込静香・編、「アフガニスタン文献目録稿」、財団法人アフガニスタン協会・発行/榊シルクロード・発売、1981・、130p、2,000円、(和文・欧文文献の目録)。
- ⑲三浦徳平、「一下士官のビルマ戦記 — ミートキーナ陥落前後 —」、葦書房、1981・、1,500円。
- ⑳加藤敬・写真/松長有慶・解説/杉浦康平・構成・造本/佐藤健・小林暢善・協力、「マンダラ — 西チベットの仏教美術 —」、毎日新聞社、1983・3、B4判変型(34.2×25.6)二巻・上製帙入り、〔図像編=240p、解説編=200p〕、6,800円。
- ㉑佐藤圭四郎、「イスラーム商業史の研究 — 附・東西交渉史 —」、同朋舎、1981・1、5,433p、59p、9,800円、(「東洋史研究叢書之三十三」)。
- ㉒金子民雄・編、「ヘディン著書目録」、日本山書の会、1981・1、写真+IV、101p、3,500円、(「山書研究」25号)。
- ㉓中村元、「初期ヴェーダーンタ哲学史」、岩波書店、1981・3、全四巻、23,000円、(予約限定出版・復刊)。
- ㉔白鳥庫吉、「西域史研究 上・下」、岩波書店、1981・3、上巻=xi+526p、4,500円。下巻=viii+663p、5,500円、(改版。解説=榎一雄)。
- ㉕沖守弘、「沖守弘写真集 — マザー・テレサ その人と愛」、青也書店、1981・3、104p、3,200円。
- ㉖趙縹初・塚本善隆/監修、日中友好仏教協会・中国仏教協会/編、「中国仏教の旅・5 — 蘭州・麦積山・炳靈寺他 —」、美乃美、1981・2、192p、2,500円、(全巻完結)。
- ㉗長岡暁生、「ヒンドゥー占星術」、潮文社、

1981・3、262p、680円、(リヴブックス)。

㉔加藤喜一郎、「山に憑かれて」、中央公論社、1981・3、282p、380円、(中公文庫M194。1957年文藝春秋新社・刊、「山に憑かれた男」の文庫版)。

㉕小西政継、「北壁の七人—カンチエンジュンガ無酸素登頂記—」、山と溪谷社、1981・4、331p、1,300円、(「山溪ノンフィクション・ブックス」)。

㉖中村百合子、「シルクロード—天竺への道—」

㉗竹村卓二、「ヤオ族の歴史と文化」、弘文堂、1981・3、Xii、304、XXiv p、4,500円。

㉘爪生卓造、「樺の冬」、木耳社、1981・2、307p、2,000円。

㉙沖守弘、「マザー・テレサ—あふれる愛—」講談社、1981・3、256p、980円。

㉚佐藤任、「悲しき阿修羅」、平河出版社、1981・3、290p、1,600円。

㉛高橋秀夫、「イレドの仏教美術—仏像の源流を尋ねて—」、全国会計職員協会、1979・10、Xvi、238、14p、1,700円。

## 中国語版図書

①青海省生物研究所・編、「西藏阿里地区動植物考察報告」、北京、科学出版社、1979・4、227p、2.35元=1,200円、(初版3,550部)。

②四川省民間文芸研究会・四川民族出版社/編、「阿呷登巴的故事(漢文版)」、成都(四川省)・中国、四川民族出版社、1980・7、171p、0.67元=410円、(初版5,700部)。

③西藏民族学院預科藏文教研組/編、「藏漢対照常用詞汇」、成都(四川省)・中国、四川民族出版社、1980・6、941p、3.50元=1,750円、(初版2,700部)。

④詹承緒・王承權・李近春・刘 茂初/著、「永寧納西族的阿注婚姻和母系家庭」、上海、上海人民出版社、1980・9、321p+写真、1.35元=810円、(初版4,300部)。

⑤蔣一葵、「長安客話」、北京、北京古籍出版社、1980・8、180p+2p+1p、0.75元=450円。

⑥中国民間文芸研究会吉林分会・編、「吉林民間故事選」、長春(吉林省)・中国、吉林人民出版

社、1980・6、193p、0.70元=420円、(初版=20,880部)。

⑦上海文芸出版社・編、「中国民間長詩選・上下」、上海・中国、上海文芸出版社、上巻=1980・6、644p、2.15元=1,200円。下巻=1980・6 690p、2.30元=1,200円。(初版各25,000部。「中国民間文学作品選」)。

⑧石興邦、「半坡氏族公社—考古資料反映的我国古代母系氏族社会制度—」、西安(陝西省)・中国、陝西人民出版社、1979・8、169p、0.76元=460円、(初版=18,000部)。

⑨田兵・李独清、等著、「貴州名勝古迹第一」貴陽(貴州)・中国、貴州人民出版社、1980・9、69p、0.22元=140円、(初版2万部)。

⑩金光平・金启稼/著、「女真語言文字研究」、北京・中国、文物出版社、1980・7、376p、6.30元=3,150円。

⑪秋浦、「鄂倫春社会的發展」、上海(中国)、上海人民出版社、1980・10、212p、1.40元=840円、(精裝版、初版2,200部。平裝版=1978)。

## ヒマラヤ集会予告

### 《日本ヒマラヤ会議・秋田会場》

日 時 昭和56年6月13日13時~14日12時

場 所 秋田県田沢湖高原 田沢プラトールホテル

会 費 8,000円(宿泊料、懇親会費、資料代等を含む)

問合せ 事務局、又は下記へ申しこんでください。くわしい資料をお送りします。なお、申込み順40名で締切りますので早目をお願いいたします。(6月5日までに)

## カンチ通信 No3

3月11日 雨の中をこのルートの最奥の部落である「ヤンボディン」に着き、早速小学校の校庭を借りてキャンプ。午後1時から4日分の賃金の支払を開始5時終了。ここでの休養を考えていましたが日程が遅れているため明日は出発することになり夜遅くまでかかって隊荷の整理。

3月12日 心配したポーターも結局は余る破目になりました。このため賃金の折り合いも付き、11時過ぎには全員が出発。今日の行程は水場の都合で一山越えた沢筋と非常に近い。

3月13日 今日のキャラバン行程はこのキャラバンの中で最高所の3,400mの峠を越え、更にこの峠からの北斜面には積雪もあり、行程も長いので心配したが、小雪の舞う天候であったが午後5時半には全ポーターがキャンプサイドに到着。しかし、夜はひどい雨に見舞われた。

3月14日 3,800mのツエラムへ向かう。雪となりポーター達は、それぞれ隊のシートを使って泊る者や岩小屋に泊る者など、それぞれが雪を避けて一夜を過す。夜半、ポーターの容態がおかしくなりドクターが往診する。一時は大騒ぎになったが胃の病気と判明。この日、ヤク一頭を購入。

3月15日 400名以上のポーターが入れる最後のカルカ「ラムゼー」着。既に高度は4,350mとなり隊員の中にも頭痛を訴える者も出てきた。ヤンボディンからの賃金を払うとポーター達は急ぎ足で帰って行きます。ヤンボディンのポーターの中には若い美しい娘達も混っていて、良くも大の男達と同じ30kgの荷を4日間も担いで来たものだと感じました。ここラムゼーからは普通のポーターは入れません。足ごしらえのしっかりした、選別されたポーターが、既に先発隊によって約100名雇用されており、これらのポーターによって、3日行程のベースキャンプまでの荷上げが行われます。

3月16日 隊員は18日間休みなしでキャラバンを続けて来ましたので、今日は休養日としました。

先発隊の7名は、この日約5,500mのベースキャンプ入りを果しました。これはイラムからキャラバンを開始して29日目になります。

3月17日 高所登山は序々に高度に順化して行く必要があります。これからベースキャンプ以降の登山に備えて、高所経験の少ないメンバー6名を高所順化訓練に出しました。尾形登攀リーダーの指導の下に3日間の予定で約5,000mまで経験する予定です。昨日から約70名のポーターにより荷上げが始まっていますのでその管理のため、八嶋、角田両隊員が、グレッシャー・キャンプ(GL・C)に登りました。ツエラムでヤクを料理する。

3月18日 先発隊は、ベースキャンプ(B・C)からルート工作を行い50mピッチで18ピッチ登りました。順化パーティは、グンサ方面の約4,800mの峠に立ち、ツエラムへ戻りました。峠からは、シッキム方面の山々や遠くエベレストも望見出来ました。

3月19日 第一回目の日本からの便りが届き、各隊員、嬉しそうでした。ヤルン氷河は雪が少なく、我々にとっては輸送の面からは大いに助かっています。

3月20日 先発隊は3日間のルート工作の末、第一キャンプ(C1)予定地に到着しました。ここは標高約6,150m。大きな屋根上の雪庇に守られた場所です。この日で、ラムゼーの本隊々貨のほとんどが次のGL・Cに運ばれました。隊員も22日には全員がGL・Cに移動する予定です。

雲湧き春近いラムゼー草原より  
(山森・記)

3月21日 一番若い隊員の鈴木治君がこの高度にも順化し切れず苦しんでいるため明日2,000 m台まで降ろすことにしました。このヤルン氷河の2つのキャンプを経由してベースキャンプまでの4日行程には、足ごしらえのしっかりした、カトマンズから選抜して来た66名と地元グンサから選抜した30名の計96名のポーターが隊荷の輸送に当たっています。

3月22日 昨夕の雪が5~6cm積もり一面の銀世界です。本隊はラムゼーを離れグレッシャーキャンプ(GL・C)へ移動しました。調子の悪い鈴木隊員には八木原登攀リーダーが付き添いこの日は約3,500 mまで降ろしました。

この日先発隊の山田チーム3名はC1(6,150m)に入りC2ルート工作に備えました。

3月23日 メールランナーをタブレジュンまで降ろしました。今回のメールの手順は、①隊のキャンプからタブレジュンまでメールランナーが走る。②タブレジュンからは火曜・金曜の週2便カトマンズ間を飛んでいるRNA Cの軽飛行機でカトマンズまで運ぶ、③カトマンズでこれを引取り通常の航空便で日本へ送る。以上のようになっていますが、カトマンズ便の軽飛行機が雲が多いと降りないと云うことが多々あり予定通りには行きません。C2へのルート工作は多量の積雪により意外と伸びませんでした。

3月24日 ヤルン氷河上の約4,750 mにあるこのグレッシャーキャンプの朝6時の気温は-16℃です。B・Cは-20℃前後です。B・Cまでの各キャンプ間の荷上量は、ポーター30kg、シェルパ20kg、隊員15kg。休みは、隊員、シェルパは4日間行動の後1日休み。ポーターは5日間行動で1日

休み。

3月25日 本隊々員は休養日です。先発隊の山田チームはC2予定地までルートを伸ばしました。夕方、写真家の白旗史郎氏一行がこのキャンプ地に到着。カトマンズ以来の再会でした。

3月26日 上のキャンプへ移動の予定でしたが、昨夜からの雪のためポーターが動かず延期です。ポーターもこの氷河上にもう一ヶ月もいますのでその体調管理もなかなか大変です。

3月27日 次のキャンプであるターニングポイントキャンプ(TP・C)に移動しました。ここは標高約5,000 m。目の前にベースキャンプのある通称「パッへの墓のある丘」がみえ、目標であるカンチ主峰やヤルンカンの英姿がうかがえます。

3月28日 全員で待望のベースキャンプを往復しました。この日より徐々にポーターの解雇が始まりますので支払準備をしました。一昔前のヒマラヤで語られた小額紙幣の件も、現在では今は昔の話です。500Rsや100Rs紙幣を受取っても文句は出ません。勿論1Rsや5Rsの小額紙幣が多いのは今も変わりません。

3月29日 ポーター達は約1ヶ月の支払を受けて約半数がヤルン谷を降りて行きました。隊員達との別れを惜しむ者。貸し借りの精算をする者等等支払の時はいつもながら、ポーターの協力に感謝しつつもその使途が気がかりになります。夕食の時、このヤルン氷河を囲む山々の全てが残照に染まると云う現象に出会い、皆カメラを持ってテントを飛び出して行きました。C2に入った先発5名も又、この光景の中にあって、大自然の素晴

### ＝カンチェンジュンガ隊ご声援に感謝＝

既に新聞等でご承知と思われませんが、本会が派遣したカンチェンジュンガ学術隊登山部門の結果が出ました。目的としたヤルン・カン(8,505m)とカンチェンジュンガ主峰(8,598m)の縦走は残念ながら断念せざるを得ませんでした。しかしながら両峰の頂上に10名の隊員と1名のシェルパを

ほぼ同時刻に送込み、縦走体制を築くことができたことは、高く評価されることです。詳しくは、隊員帰国後、速かに誌上でご報告いたしますが、取急ぎこれまで皆さんから寄せられた、ご協力とご声援に対し、厚く御礼申し上げます。なお、隊員は6月中旬頃に帰国予定です。

らしさとその真ただ中にある幸せをかみしめていました。

3月30日 本隊々員は休養日。ここから先発隊5名によるC3(ABC・グレートシェルフ)へのルート工作を見ることが出来ます。なかなかのピッチで進んでいます。C1にはシェルパも入り荷上げが開始されています。

3月31日 本隊は待望久しいベースキャンプ入りを果しました。ダーランバザールを2月26日出発して以来18日間ノンストップでラムゼーに到り、このヤルン氷河を高所順応を兼ねて16日間。合計34日間と云う長いキャラバンでした。ベースキャンプは標高約5,500m。多分世界で一番高所にあるベースキャンプとなるでしょう。

先発隊はこの日遂に、グレートシェルフに到達しABC(C3)約7,300mの予定地を決定しました。先発隊が日本を出発して2ヶ月目になりました。夕食は本隊ベースキャンプ入りを祝ってささやかな祝宴を張りました。

東の強風吹くB・Cにて  
(山森・記)

4月1日 昨夜からの雪がB・Cで約20cmの積雪となり一面銀世界。午前中リーダー会を開き交差縦走の確認と、第一期、第二期のメンバー配置を決定。午後から上部で頑張りグレートシェルフのABC予定地(約7,300m)までルートを伸ばして山田他5名の先発隊がB・Cへ降りて来た。夜は先発本隊の合同のため遅くまで話がはずんでいました。

4月2日 朝7時頃から強烈な東風がタルンサドルを越えてB・Cを襲いました。快晴の中9時半よりシェルパによる安全登山祈願祭が行なわれ立派なタルチョーがB・Cにはためきました。隊員打合わせの後、シェルパも含めた顔合わせ、サーダー、L/O、リーダーの打合わせと、本格的な登山の前に忙しく準備に追われました。

4月3日 先発隊7名は、先発としての任務を無事果たしたため、ラムゼーへ1週間の休養のため降りて行きました。今日から本隊々員も高度順化と荷上げのためC1を往復しましたが何人かはC1へ到達出来ませんでした。

4月4日 このところB・Cは暖かく、朝6時頃の気温が-10℃前後になって来ました。風は相変わらず強く吹いています。カトマンズとの無線による交信は4月1日にオープンして以来、毎日11時と16時にコンタクトしていますが、うまくとれるのは半々位です。B・Cはスズキ自販から提供を受けた2台のジェネレーターで隊員メス TENT(ハイピーシートとプラパールで作った小屋の中いろいろを掘りベフマットを敷きつめた快適な所です)とキッチンはいつも明かるく保たれています。

4月5日 去年の偵察の時の気候は、朝晴れていても10時頃からヤルン谷下流に発生した雲がカンチの広大な西壁に当り午後は降雪。そして夕方からまた晴れるというのが普通でした。(これをヤルン気候と呼んでいた)しかし、今年は、晴れっぱなしが多く気味の悪い程でした。今日は久々のヤルン気候。就寝前にテントの外に出てみようと満天の星空となり、カンチ山群の上空には北斗七星がさんざんと輝いておりました。

4月6日 C1からC2へのルートには、裏側ルンゼと呼んでいる5ピッチほどの下降しなければならぬ場所があります。この裏側ルンゼ内でルートの整備をしていた尾形パーティを落氷が襲いました。頂度、ザックを置き工作用資材を採り出す時でしたので、逃げる間もなく、尾形は頭部に氷を受け若干怪我をし、八嶋のザックは遙か下のクレバスまでとばされ、チノンの8mm撮影機1台、ニコン35mm写真機1台、双眼鏡1台等を粉失してしまいました。しかし、他の2人の隊員は怪我もなく不幸中の幸いと云うところでした。

4月7日 本隊々員もC1へ移動しました。この時点で谷岡、二階、鈴木(治)の3隊員が高所順化のローテーションに乗れず、それぞれの症状に

合った順化を行っています。

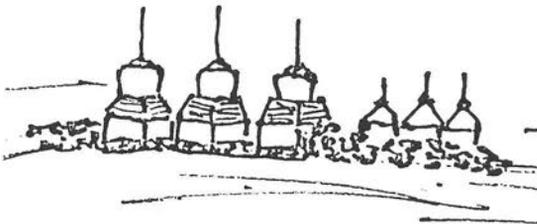
4月8日 この4日間の好天でカンチ山群の上部8,000 m以上は岩肌が黒々としています。あまり岩が出て来るとファイナルキャンプの設営場所が問題になります。

4月9日 ラムゼーに降りていた先発隊も休養を終えてB・C入りしました。先発隊には個性的なメンバーが多いので一辺に賑やかになりました。5,500 mのベースキャンプでは流石に酒を飲む人は少なくなります。ちなみに今回の隊員22名の内煙草を吸う者は1名(BCまでにこの1名も禁煙)酒の強い者約5名ですが、ほとんど飲みません。飲み過ぎるとひどい二日酔いになるからです。

4月10日 最先端にいる尾形パーティがB・C休養を希望しているので、先発隊から山田、藤倉、片岡の3名を上部に上げることにしました。6,500 m付近にある第二の順化帯が頂度C 2の位置になります。過去のヒマラヤ登山で「高山病」とはつきりしている事故の多くはこの付近で発生しています。又、7,000 m下から急激に寒気が厳しくなることも知られているところです。この辺の高所・環境順化なくして8,500 mへ到達することは不可能なので慎重に対処しています。カトマンズとの交信で学術隊が4月13日出発することを知りました。又カンチ南峰、中央峰のオープンも知りましたが、我々は既にこの両峰を放棄し、西峰～主峰の交差縦走一本に目標を絞って活動しております。

春の息吹きの中

(山森・記)



## ＝学術隊便り＝

### 学術隊キャラバン開始

五百沢智也氏を隊長とするカンチェンジュンガ学術遠征隊学術部門の第1次隊は、3班に分れて日本を出発した。

一行は、4月13日にカトマンズを発ち、15日にイラムからキャラバンを開始した。

カンチェンジュンガBCに着くのは4月末になる予定である。天候が不順で4日に一度ぐらいのわりで雪や雨があり、仲々大変なもようである。

次号でくわしく行動をお知らせしたい。

---

## 藤江幾太郎 山の画展

日時 6月19日(金)～24日(水)

所 東京新宿・小田急百貨店7F美術サロン

昨秋2ヶ月のネパール取材による作品の外、奥武蔵、北海道などの作品20数点展示されます。ご来観下さい。

---

### 山の画集・特装版のご案内

内容：限定30部 特製 入(外函)ダンボール箱、ネパール、タンカ表装綿使用の表紙、著者自筆素描淡彩貼付、署名番号落款入り、頒価22,000円

---

## ■ 特集

# ネパール・ヒマラヤの新解禁峰

1981年4月発表にもとづいて

H A J高所登山委員会

Jongsang Peak 7473m

ネパール政府は、4月中旬、新たなピーク37座を追加し、登山の対象とするオープンピークを全面的に改定し、発表した。

以前、H A Jの招請で来日した観光省登山部長S・R・シャルマ氏が言明していたように、ネパール政府はその重要な観光施策として徐々にオープンピークを拡大して行くというラインに基づいたものである。

新たにオープンされたピークには、魅力ある未登峰も多数ある。また、従来ネパール人隊にしか登山が許可されていなかったピークが外国人隊にも門戸が開かれるなど大巾な改定がなされている。

アルパインスタイルを主流として世界登山界の最も新しい登攀様式が実践されているネパール・ヒマラヤであるが、今回の発表により新たな波が加わり、空前のラッシュが予想される。

H A Jではいち早くリストを入手することができたのでその概要を以下に特集してみた。

## 今回の改定の特徴

発表されたリストを一見してみて次のようなことが言えよう。

1.従来の「ネパール人隊にのみ許可」という区分がなくなり、すべてのオープンピークに外国人隊の登山が可能になったこと。

Jongsang Peak(7,473)、Ohnmi Kangri (7,028)、Gyachung Kang(7,922)、Karyolung (6,681)、Dorje Lakpa(6,681)、Chamar (7,177)、Bhrikuti(6,723)、Gurja Himal

(7,193)、Changla(6,715)の9座がこれである。この9座は、我々にとって事実上新たにオープンされたピークと同意語である。

この中で、Bhrikuti , Kerolung , Dorje La -kpa Ohmi Kangri , Changra の5座は未登峰である。

2.カンチェンジュンガ周辺、ジュガル・ランタンヒマール、カンジロバ山群、西ネパールを主として新たにオープンされたこと。

特に、ジュガル・ヒマールは今回初めて開かれた地域であり、カトマンズから至近距離にある

ということであれしいニュースである。

また、東部のインドとの国境、Char Chu 流域、アンナプルナ、マナスルの北方、西ネパール奥地等の国境沿いのピークがオープンされた。ネパール政情の安定誇示の意味もあろう。

特に、西ネパールのNala Kankar, Changla などは興味深い地域にある。

3.支峰、衛星峰、マイナーピークまで対象になっていること。

Madiya Peak(6,800)、Gyalzen Peak (6,705)、Kangchenjunga Central(8,496)、Manaslu North(7,156)、Himal Chuli North (7,371)、同West(7,540)、Manapati(6,380)、Junction Peak(6,139)、Lobuche West(6,145) などである。

以前に、主峰の近くの衛星峰に登って問題化したケース、或いは「山群」として解釈してトラブルがあったケースなどが見られた。今後、登山規則の解釈と適用はより整備されたものになろう。

4.全域的にオープンがなされていること。

特定地域への登山隊集中によって生ずるさまざまな問題の顕現を防ぐ意味がこめられていると思われる。

5.トレッキング許可で登れるピークに関しては変更がないこと。

ヒマラヤのピークはネパール政府にとって重要な観光資源であり、今後とも大切に徐々にオープンされて行くであろう。今回の改定はかなり思い切ったものであり、昨年来から極めて高いレベルの問題として慎重に検討されてきたようである。

登る側としては、ネパール政府の意を体して、トラブルのないように対処していきたいものである。

## オープンピークのリスト

①印は今回新たにオープンされたピーク

※印は未登峰

I. ネパール人の登山隊、もしくは、ネパール人と外国人のジョイント隊にオープンされるピーク(少なくとも3名のネパール人隊員を加えること)

<カンチェンジュンガ周辺>

○Tent Peak 7,365

※Ohnmi Kangri(Ohmi Kangri)7,028(7,922)

Nepal Peak 7,168

Jongsang Peak 7,473

<クンプ>

Gyachun Kang 7,922

<ロールワリン>

※○Karyolung 6,511(6,681)

<ジュガール・ランタンヒマール>

○Big White Peak 7,083

※○Phurbi Chachu (Phurbi Chyachu) 6,658

○Madiya Peak 6,800

○Gyalzen Peak 6,705

※Dorje Lakpa 6,990

※○Langtang Ri (Lantang Ri) 7,239

<ガネッシュ・マナスル周辺>

Chamar 7,177

<ダウラギリ周辺>

※○Bhrikuti 6,723(6,720)

Gurja Himal (Gurza Himal) 7,193

<西ネパール>

※Nala Kankar 6,660(6,935)

※Changla 6,715 以上17峰。



Phuribi Chachu 6,658m(風見武秀氏撮影)

II. ネパール人と外国人のジョイント隊のあとに外国隊にオープンされるピーク。(15峰)

<カンチェンジュンガ周辺>

○Kangchenjunga Central 8,496

○Kangchenjunga South 8,490

<クンプ>

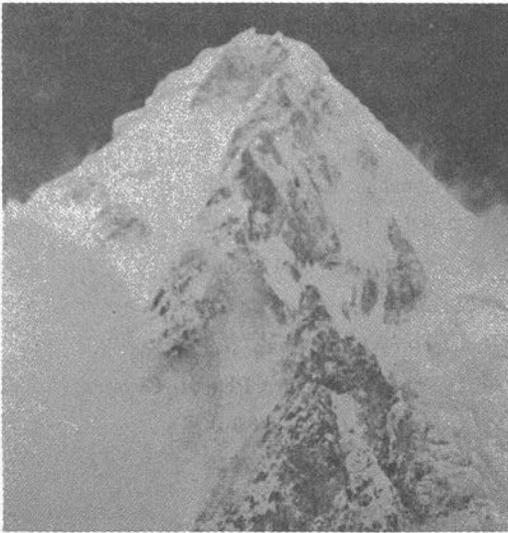
Chamlang 7,317(7,319)

○Cho Oyu 8,153

○Lhotse Shar 8,511(8,383)

※○Ngozumba Kang(Ngozumbakang) 7,806

○Shartse (Shartse Himal) 7,502



Himlung Himal 7,125 (電々九州隊撮影)

<ガネッシュ・マナスル周辺>

- Ganesh Himal - I 7,406
- Ganesh Himal - III 7,132
- Ganesh Himal - V 6,950

- ※○Himlung Himal 7,125
- ※○Cheo Himal 6,812

<アンナプルナ・ヒマール>

- Roc Noir 7,485

<西ネパール>

- ※○Bobaye (Bobaye Himal) 6,808
- ※○Jetibohurani (Jethi Bahurani) 6,849

III. 外国隊にオープンするピーク (72峰)

<カンチェンジュンガ周辺>

- Kangchenjunga - M 8,598
- Yalung Kang 8,505 (8,420)
- Kangbachen 7,903 (7,902)
- Jannu 7,710

<クンプ・マカルー周辺>

- Ama Dablam (Amadablam) 6,856
- Baruntse 7,220
- ※○Cholatse 6,440
- Cho Polu 6,734
- Everest (Sagarmatha) 8,848
- Lhotse 8,511
- ※○Lobuche West 6,145

- Makalu 8,481
- Makalu - II (Kangchuntse) 7,660 (7,640)
- Nuptse 7,879
- Pumori 7,145
- Tawetse (Taboche) 6,542
- Thamserku 6,608 (6,623)
- Kantega (Kangtega) 6,779 (6,809)

<ロールワリン>

- Gaurisankar (Gaurishankar) 7,146 (7,150)

- Chobuje 6,689 (6,638)

- ※○Khatang 6,853

- Numbur 6,959 (6,954)

<ジュガール・ランタンヒマール>

- ※○Langshisa Ri 6,300

- Langtang Lirung 7,245 (7,246)

<ガネッシュ・マナスル周辺>

- Ganesh Himal - II 7,150

- Ganesh Himal - IV 7,102

- Baudha 6,672

- Himal Chuli (Himalchuli) 7,893

- Himal Chuli North (Himalchuli North)

- Himal Chuli 7,371

- Himal Chuli West (Himalchuli West)

- Manaslu 8,156 7,540

- Manaslu North 7,156 (7,157)

- Peak 29 7,835 (7,514)

<アンナプルナ・ヒマール>

- Annapurna - I 8,091

- Annapurna - II 7,937

- Annapurna - III 7,555

- Annapurna - IV 7,525

- Annapurna South 7,219 (7,273)

- Fang 7,647

- Gangapurna 7,455 (7,454)

- Glacier Dome 7,193

- Kang Gru (Kanguru) 7,010 (6,981)

- Lamjung Himal 6,983 (6,986)

- Tilitso Peak (Tilicho Peak) 7,134 (7,132)

- Nilgiri Central 6,940

- Nilgiri North 7,061

- Nilgiri South 6,839

<ダウラギリ周辺>

- Churen Himal 7,375  
 Dhampus (Dhampas) 6,012  
 Dhaulagiri - I 8,167  
 Dhaulagiri - II 7,751  
 Dhaulagiri - III 7,715  
 Dhaulagiri - IV 7,661  
 Dhaulagiri - V 7,618  
 ○Dhaulagiri - VI 7,268  
 ○Hongde 6,566(6,556)  
 ※○Manapati (Manapathi Himal) 6,380  
   Putha Hiunchuli 7,246  
 ○Sita Chuchura 6,611  
   Tukuche Peak 6,920  
 <カンジロバ・ヒマール>  
 ※○Hanging Glacier Peak 6,500  
   (Jagdula 5,785)  
 ※○Junction Peak 6,139  
   Kagmala - I 5,962(5,960)  
   Kande Hiunchuli 6,627  
 ○Kanjeralwa 6,612  
   Kanjiroba 6,883(6,882)  
   (Patراسي 6,860)  
   (Sisne Himal 6,945)  
 <西ネパール>  
 APi 7,132  
 Nampa 6,754  
 ○Saipal 7,031

## トレッキング隊にオープンする ピーク (18峰)

- <クンプ>  
 Island Peak 6,169(6,153)  
 Mera Peak 6,461(6,431)  
 Mehra 5,820  
 Kusum Kangguru (Kusmu Kangru) 6,369  
 Pokalde (Pokhalde) 5,806  
 Lobuje 6,119  
 Kongde Ri 6,194  
 <ロールワリン>  
 Ramdang Go (Ramdung) 5,930(6,021)  
 Pharchamo 6,282  
 <ランタン・ヒマール>

- Paldor (Paldor Peak) 5,928(5,894)  
 Gangjala Chuli 5,806  
 <アンナプルナ・ヒマール>  
 Tent Peak 5,663(5,500)  
 Hiunchuli 6,337  
 Fluted Peak 6,390  
 Mardi Himal 5,587(5,555)  
 Pisang Peak (Pisang) 6,019(6,091)  
 Chulu West 6,630  
 Chulu East 6,200

※なお、リストの中の( )内については、ネパール政府発表のスペル、あるいは標高である。また、全体を( )でくくってあるものは、同等等がはっきりしないものである。

## 新オープンピークなどのあらまし

今回新たに追加されたピーク、及び外国隊の許可対象としてワクが外されたピークのうち、まだ登頂されていないピークのあらましを紹介してみる。

### Ohnmi Kangri 7,028m

東ネパール、タムール河の上流シャオ・チュウのバンドラ氷河の源頭、中国との国境上にある。1949年のスイス隊は、チャブク・ラを越えてテベット側のチャブク氷河に入った。彼らは「ヌブチュー」をめざして6,800 mまで達したが、これは現在のオンミ・カンリらしい。62年の大阪府立大隊はヌブチューに登頂したが、やはり7,028 mの標高を与えている。63年の大阪府立大と東京都立大合同隊はシャルプーの登頂後広く東北ネパールを探り、ヌブチューとオンミ・カンリの混迷の解明に功績を残した。彼らはオンミ・カンリの間近に迫り、バンドラ氷河を囲む山々の地形を明らかにしている。

飛行場もあるタブレジュン(現在、週2便運航)からタムール河沿いに入る長いキャラバンとなる。この付近の地形はまだ十分に解明されていない。

### Phrbi Chachu 6,658m

カトマンズ盆地の北東にはっきりと見ることができる。おおとりが翼を拡げたような山容をなし、山名は「東方の大きなこうもり」の意味である。ジュガル・ヒマールの入口にあって、ブルビチャチュンブ氷河の左岸に圧倒的な氷壁を落している。標高の割に巨大であり、美しい。

チョータラまで車が入り、短かいキャラバンでBC入りすることができる。

1955年の英国女性隊、57年の英国隊がこの氷河に入っている。

58年に深田久弥氏の隊がすばらしい写真をもたらした。また、60、61、62年と3度にわたって全日本岳連隊がビッグ・ホワイト・ピークをめざしてこの氷河にキャンプを進めた。

ブルビチャチュンブ氷河側の氷壁からの登攀が課題である。ノースム・コーラ側から国境主稜をルートにとることもできよう。

### Langtang Ri 7,239m

ランタン谷の最奥、国境上にそびえる優美などっしりとしたピークである。

ティルマンの科尔から北に長い雪稜が伸びるが、上部にギャップをもった鋭いナイフリッジを隠しており、両サイドはすっぱりと切れている。

1949年、H・W・ティルマンが同名の科尔に達し、また、54年、ドイツのアウシュナイターがこの地域を詳しく探って地図を作成した。

しかし、ランタン谷のピーク同定は、わが国では一時期混迷をつづけ、「ランタン谷の解明」に関して検討がなされたことはまだ古いことではない。71年ポストに、梶正彦氏らがネパール政府の特別のはからいによりこの地域に入り、ティルマンの科尔を経て雪稜を約6,000mまで登っている。すぐ近くにシシャ・パンマ(8,013)があり、これは中国側のオープンピークとなっている。

### Bhrikuti 6,723m

アンナプルナ山群の北方、ダモダール・ヒマ



### Langtung Ri 7,239m (中央奥がピーク)

ルの北端の国境に位置する。

マルシャンディ河の支流ナウル・コーラに沿ってキャラバンを進め、南面からアプローチできる。すぐ近くに「ムスタン・ラ」がある。

また、ジョムソンから北上し、テンガ・コーラおよびテハチャン・コーラからも接近できる。チベット高原の一角にあり、乾燥地帯の特異な景観とともに興味を引くピークである。

### Nala Kankar 6,660m

西ネパールのジュムラがキャラバンスタートの基地になるが、10日以上を必要とする。

Takpu Himalとも呼ばれる。

1963年ポストに北海道大学隊がこの山を目ざした。しかし、地元住民に聞いても不明で、住民のいう「ニャモナニール」に接近した。しかし、明らかに中国領内なので南のタクブ・ヒマールに転進した。ニャモナニールは「グルラ・マンダータ7,728」である。

タクブ・ヒマールには7,000m以上の高峰は存在せず、測定の結果ナラカン・カールが最高峰であった。

### Nala Kankar 6,660m (北海道大学隊撮影)



高い雪線をもったテーブル状の白い山で、北方には広大なチベット高原が展開する。技術的な問題は無いようである。

この付近の地形解明、そしてキャラバンルートは興味深いものである。

### Changla 6,715m

ジュムラの真北、中国との国境にある 20,467 フィート峰がそれである。

カルナリ河の支流ランケ・コーラの源頭にあつている。

ナラカン・カールと同様、この付近の解明はこれからのテーマである。

西ネパールにおける中国との国境の山がオープンされたことは、中国との間にこの地域の国境画定がなされたことを意味しよう。

### Ngozumba Kang 7,806m

ルンダサンバ氷河の奥には、西からチャー・オユー、ゴジュンバ・カン I 峰 (7,806)、同 II 峰 (7,646)、そして、ゴジュンバ氷河の源頭に III 峰 (7,601)、ギャチュン・カン (7,922) が並んでいる。

II 峰は 1965 年に明治大学隊がゴジュンバ氷河側から初登頂したが、主峰 (I 峰) はまだ登られていない。

顕著なピークではないが山容は大きく、高度的には今回の未踏のオープンピーク中最高い。

ルートは当然南面からとなる。アプローチはよい。

### Himlung Himal 7,125m

マルジャンディ河岸のトンジュからドウド・コーラをつめる。

現地名で「ニムロン」といい「太陽のすみか」を意味する。

力強い美しさと厳しさを持った山容はシニオルチュウを連想させる。

この付近の地図はまだ確定されていないようである。五百沢智也氏が撮影した航空写真をみると、もっと奥まで氷河がのび、広大な氷河圏をなしている。また、ヒムルン・ヒマールのずっと西方にはおそらく 7,000 m を越すと思われる大きな山塊

を指摘できる。

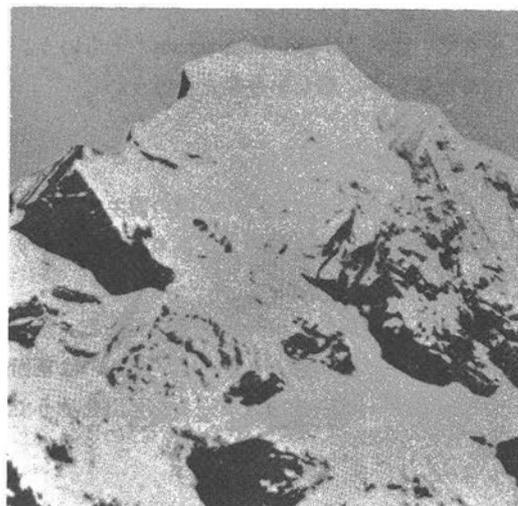
1963 年ブレに電々九州隊が 6,800 m に到達している。翌年のオランダ隊も頂上直下で断念し、依然として未踏を誇る困難なピークである。

### Cheo Himal 6,812m

ヒムルン・ヒマールの南東に大きな氷河を隔て位置する。ボリュームのある山で、南面に短い支稜を出しているが急峻である。

ヒムルンとの間の氷河の状態は悪く、側壁が切り立っている。

しかし、ピークをとり囲むような氷河の地形がよく判明していないので思わぬルートが見つけれられるかも知れない。



Bobaye 6,808m

### Bobaye 6,808m

ナンバ山群の N 3 から南へ派生するバンキアレク山稜上に、ボバイエ、ジェティボフラニ、ロカビなどが並んでいる。

大きな頂稜をもったピークである。アプローチはインド側の鉄道の終点ゴウリファンタから国境を越えることになる。

キャラバンのスタートはこの界わいで一番大きな街であるダンガリになる。約 1 カ月の長いアプローチマーチが必要である。

キャラバンルートは、カリ河の支流のチャムリア河沿い、その源頭までさかのぼる。

1972 年ポストの名古屋大学隊が詳しく調査している。

### Jetibohurani 6,849m

ポバイエのすぐ南のパンキア・レク山稜上にある。1972年ポストに名古屋大学西北ネパール調査登山隊がトライしている。ネパール語で「兄嫁」という意味だという。

名大隊は、ロカピ・コーラにBCを置き、C4を6,150mに建設したが、隊員の高度障害、スノーバーの不足、天候悪化、シェルパの死亡などあって断念した。

C4から上は雪のナイフリッジと雪壁の登攀になるが突破可能であると報告している。

### Cholatse 6,440m

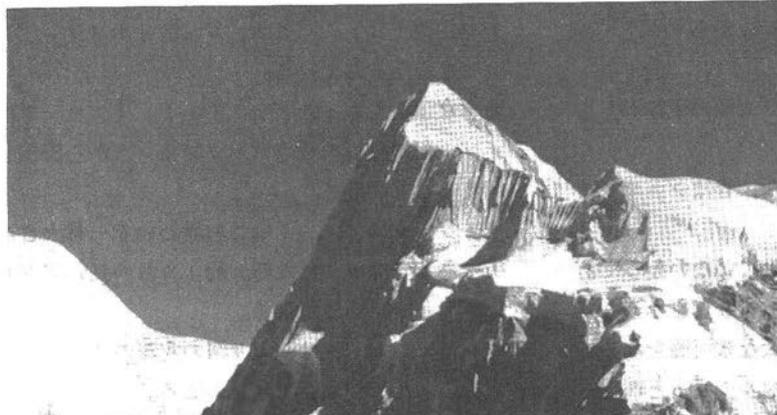
クンプ氷河の入口右岸、ロブチェの西にあるピークで、別名“Jobo Lhaptsum”ともいう。高度は低いのが、厳しい登攀となる。

### Khatang 6,853m

ロールワリン・ヒマールの南の盟主であるヌンブール(6,959)の東の稜上にあり、南にキャリオルン(6,511)がある。ヌンブールの肩のピークのように見える。南面のソル・コーラ側からよりも北面、あるいは東面のルンピング・コーラ側にルートを見出せそうである。

### Langsisa Ri 6,300m

ランタン氷河の入口右岸。頂上は幾つかに別れており、ベントン・カルボ・リに近い雪の三角形のピークが最高峰である。



Langsisa Ri 6,300m

周囲を氷河によってとりかこまれているインゼル状の山塊で、1962年に英国のグレントワースが一周している。

西面のランシサ・カルカ側は急峻であるが、ランシサ氷河から上部雪田に支氷河がのびている。

### Dorje Lakpa 6,990m

ドルジェ・ラクパ氷河とランシサ氷河の間であり、ジュガルとランタンとの接合部になっている。

カトマンズからはっきり指摘できる大きな山で、ビッグ・ホワイト・ピークとともにジュガルを代表するピークである。

顕著な支稜を四方に派生している。

1964年ブレの英国隊(L・シャフツバリ隊長)はランシサ氷河側からとりつき、カンシュルム(6,078)とのコルから西稜をたどって6,300mに達している。

この山をめざしている向きは多いようである。

### Karyolung 6,511m

ロールワリン・ヒマール、ヌンブールの南東にあたる。

長い頂稜を持った堂々たる山で、ネパールが国王のコロネーション記念登山のために外国隊にクローズしていたものである。

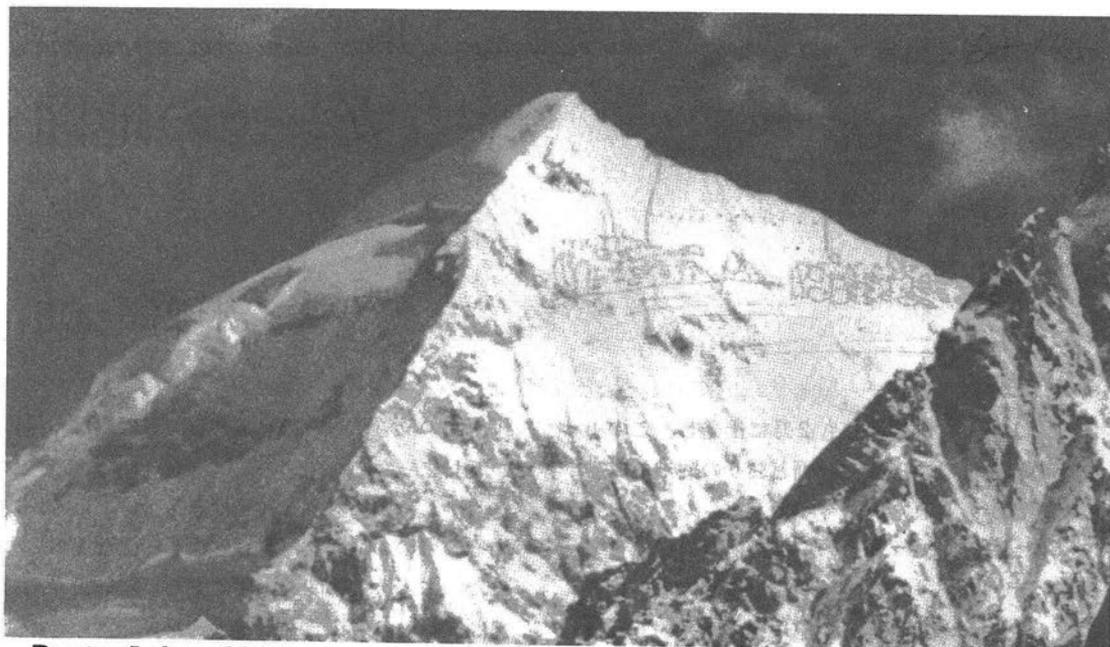
南面のソル・コーラ側、或いは東面からのルートが考えられる。

### Manapati 6,380m

ダウラギリI峰から南に派生する山稜にある。

1978年ダウラギリI峰をめざした都岳連隊は、マナパティとのコル付近にC2を設けている。

ダウラギリがあまりにも巨大なために全く見映えがしない。ミャグディ・コーラからI峰とのコルを経てのルートがとれよう。



**Dorje Lakpa 6990m**

**Hanging Glacier Peak 6,483m**

カンジロバ山群の中央にくいこむジャグドゥラ  
・コーラ流域にあり、セルク・ドルマ(6,227)から  
東に派生する山稜に位置する。

双耳峰的山容で、鋭くジャグドゥラ・コーラに切  
れ落ちている。

1973年の北里大学隊は、ボクスンド・コーラから  
この山をめざしたがアプローチ不可能とわかり、  
北方のセルク・ドルマに転進し、登頂している。

**Junction Peak 6,139m**

カンジロバ山群の東部にあり、セルク・ドルマ  
から続く主稜はこのピークで一方はカグマラ・レ  
クに、一方はボクスンド湖方面に分かれる。  
ブンブン・コーラの源頭をなしている。

1973年にHAJ隊が初登頂したカンジェラルワ  
(6,612)はこのピークの南東にある。

東面および南面ともに岩壁をなしており手強わそ  
うである。



ヒマラヤ登山の専門家

**SITA**

並ぶものない山岳サービス

- ★インド政府許可証
- ★通関手続
- ★交通機関
- ★ポーター
- ★ハイポーター
- ★デラックス食料賄い
- ★テント宿泊用具
- ★マウンテンガイド

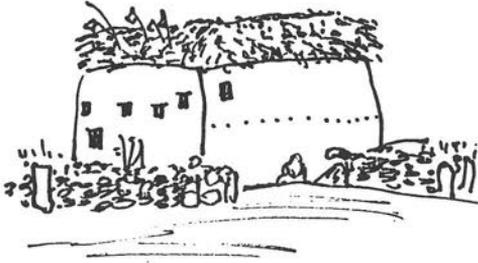
**SITA WORLD TRAVEL (INDIA) PVT. LTD.**

F-12, Connaught Place, New Delhi-110001, India  
CABLE:SITATUR PHONE:45961 TELEX:2823

日本代表

ファー イースト エンタープライゼス

東京都港区北青山3丁目6番18号 青山共同ビル ☎407-8100 (代表)



## カンチの地図

水野 勉

HAJのカンチ遠征隊も2月に出発し、この小文が印刷される頃には、計画どおりの縦走が成功しているかもしれない。今年はエヴェレスト、K2、カンチと、ヒマラヤの三巨峰に対して、日本隊がいずれもパリエーション登攀を試みるということになったが、時代は次第に変わったという印象が深い。今年は早や1981年だから当然といえば当然であろう。はじめて8,000m峰が登頂されたのは1950年のアンナプルナであったし、エヴェレスト登頂は1953年であり、すでにそれから30年も経ってしまった。

ヒマラヤの山々を楽しんで登るといふ時期には未だなっていないようであるが、もはや登攀済のルートから登ることには意義を見出さなくなってしまったのは事実である。アルプスにおける登山の黄金時代がウィンパーのマッターホルン登頂をもって終りを告げ、その後の銀の時代もだいたい19世紀で終わってしまったが、ヒマラヤではアルプスよりも規模が大きいだけに、アルプスの銀の時代におけるよりもはるかに精力的に登攀されているにもかかわらず、現在でも銀の時代がつづいている。ここ当分は銀の時代も終りを見ないであろう。

さて、カンチエンジュンガであるが、この山は古くから知られており、ダーズリンなどからはよく眺められ、山の位置などははっきりしているから、現在においては、その地図がどうのこうのという論議はあまりはやらないであろう。少くとも、登山に関しては殆んど無用というべきであろう。また、他のヒマラヤの山々についても多かれ少なかれ、同じようにいえるかもしれない。探検の時

代や山の位置について論議する時代はもはや遠のいてしまった。

しかし、山に対する興味は登るだけではない。山そのものの地理的位置、氷河の状況などはいつになっても人間の関心の中にある。学問上からいえば、むしろ登山よりもその方が興味深いといえる。科学の立場をはなれて、普通の興味(趣味といってもいいが)からいっても地図はおもしろいものである。日本人の登山活動は世界一といっている程盛んであるが、ヒマラヤの地図作りとなると、じつにさびしい限りである。これは良い悪いの問題ではないが、地図好きのぼくから見ると、たいへんさびしいし、残念である。

カンチの地図は戦前にすでに美しい、りっぱな地図ができています。

- |           |            |
|-----------|------------|
| (1) ガーウッド | 125,000分の1 |
| (2) クルツ   | 100,000分の1 |
| (3) ヴィーン  | 33,333分の1  |
| (4) ボッサルト | 150,000分の1 |

カンチ程地図に恵まれている山もあるまいというくらいである。現在ネパール地域は5万分の1地図ができつつあるが、戦前において、カンチだけは詳細な、正確な地図ができていたのである。

(1)は有名なフレッシュフィールドが1899年にカンチ付近の探査をおこなったとき同行したエドモンド・ガーウッド作成のもので、はじめてカンチ周辺の地形を明らかにしたものとして画期的なものであった。この地図はGJにも掲げられると同時に、フレッシュフィールドの名著Round Kangcheujung (1903)に掲げられているから御存知の方も多いと思う。この著書はフレッシュフィールドの文章、ガーウッドの地図、セラの写真な

どが、相まって名著の名をほしいままにした。

ガーウッドの地図はやや色彩が暗い感じがするが、美しい地図である。カンチエンジュンガ氷河、ヤルン氷河、タルン氷河、ゼム氷河の4大氷河の上にそびえるカンチの盛り上がりがよくわかる。この本は薬師義美氏訳が日本で出ており、当然この地図も付いているが、この古典的な地図そのものではなく、もっとわかりやすい現代風な地図にしてしまった。わかりやすくはなったが、元の地図の持つ古典的な高雅なふんいきが失われたのは残念というほかない。これには出版上の経済的事情がからんでいるが、日本では翻訳となると、いつもこう原書の味が失われてしまうのが口惜しい。地図を眺めて楽しむという伝統がまだ日本にはできないのであろうか。国土地理院の2万5千分の1の地図が美しくなっていくにつれても、せめて原書の地図の美しさをそのまま伝えてほしい。

(2)はヒマラヤ編年誌で有名なマルセル・クルツの作で、1930年ディレンフルト率いる国際遠征隊に参加したときに測量したときのものである。この地図はそのときの報告書Himalaya:Unsere Expedition 1930(1931)の附図として発表されたもので、(1)に比べても数段と見事な出来で、縮尺も10万分の1とガーウッドのものより詳しくなり、範囲を広くなり、はるかに大きい地図となった。120×82cmの大きさである。それになによりも明るい色調で、ガーウッドの地図よりはずっと洗練されて美しい。淡いみどり色と薄茶色と水色とが非常にマッチしている。

御存知のとおり、この遠征はカンチの登頂に失敗したが、ジョンソン・ピークに登頂した。しかし、メイスンが指摘しているように、「当座しのぎの国際的パーティ」で、すぐれた登攀ができるはずはなかった。それに隊員1人もヒマラヤの経験がなかった。ディレンフルトもクルツもスマイスもヒマラヤははじめてだった。

この遠征についてはスマイスのKangchenjunga Adventure(1930)が有名であるが、じつはこれはスマイスの個人的報告であって、隊の正式報告はディレンフルト編のHimalayaである。ドイツ語であり、しかも発行部数がスマイスの本よりも少なかったせいも、あまり知られていない。特に

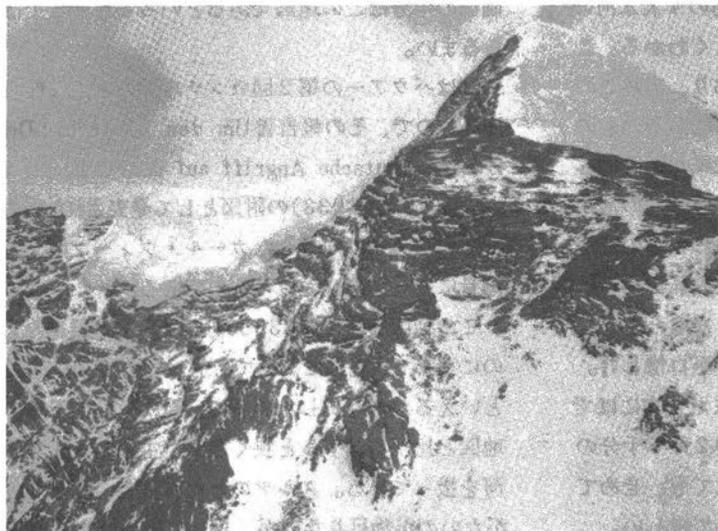
日本においてはそうである。しかし、マルセル・クルツの附図のある、この本はじつに重厚味のある、いい本である。写真もじつにいい。この本の価値の半分はこの地図であるといっても過言ではあるまい。

(3)はパウアーの第2回カンチ攻撃のときに作られたもので、その報告書Um den Kantschi:Der Zweite Deutsche Angriff auf den Kangchendzönga 1931(1933)の附図として発表されたもので、パウアーに同行したカール・ヴィーン博士の測量によって作成されたものである。

この地図は縮尺も33333分の1という詳細なものになって、現在においてももっとも詳細な地図といえるだろう。したがって、範囲は前の二つの地図と比べるとずっと狭くなり、主としてゼム氷河を扱っている。クルツのと比べると、みどり色が少ないのが物足りないが、扱った地域は氷河地帯であるからどうにもならない。しかし、クルツのにも劣らず美しい地図である。

パウアーは1929年にもカンチ攻撃をしているが、このときは地図らしい地図を作成しなかった。測量する隊員がいなかったからである。この第1回の攻撃の報告書もすぐれたものであるが、第2回の報告書もそれに劣らず良い本である。仮綴りの粗末な製本であるが、簡潔で、さっぱりした報告書である。ただし、これにもしヴィーンの地図がなかったならば、やはりいささか見劣りがするであろう。

(4)はスイス山岳研究財団が作成発行したもので現在でもシッキムの地図としては最良のものといわれている。いつ発行のものかわからないが、多分戦後ではないだろうか。これはボッサルトが描いたものであるが、どこかクルツの地図と似ている。クルツもスイス山岳研究財団の有力メンバーであったから当然といえば当然であろう。この地図も美しいが、残念ながら色彩に乏しいきらいがある。単色といってもいいくらいのもので、濃淡で差別している。これは同財団から発行されているGarhwalostについてもいえることである。もし、現在発行されるとすれば、もっと多色刷の美しい地図となろうが、やはり、戦中、戦後の傷ましさを感ずる。



5,400m付近から見たピサン・ピーク南西面

山

6091 m

## ピサン・ピーク

神田 孝

## 冬期ピサン・ピーク登頂

広大なネパールヒマラヤにあって、6,000 mを越え、かつ氷河やクレバスの発達が少ない、危険度を最少限におさえ、さらに短期間となると、その対象となる山域は限られてくる。我々が今回計画したマナン地区、別名インナーヒマラヤ、ピサンピークは、そのアプローチの長さをなんとかすれば、我々の都合に的を得ている。結局片道8日間のキャラバンをジェットヘリ・ビューマをチャーターする事によって、わずか1時間30分のフライトで、少ない休暇をカバーした。マルシャンディー最奥部へのフライトは、マルシャンディーの険しく蛇行した谷間に沿い、マナスル三山を右上に眺め、ラムジュンヒマール、そしてアンナプルナII峰の中腹(北面)をかすみながら不安と期待が交差した。18席のシートは10名までしか搭乗させてもらえず、やむを得ず2往復チャーターする。1回のフライトで荷物は約100kg可能であった。キャラバン隊のシェルパ、ポーターはすでに10日前にカトマンズを立ち、予定通りヘリコプター着陸地点ピサン部落で1979年12月24日合流した。

## B・CよりA・C

B・Cよりピサン部落を抜けて左手にチュルーをながめながらピサンピーク左尾根へ取りついた。初日は高度順化の為C1(4,200m)偵察の予定であったが、カトマンズより1時間10分で一気に入山したせいも、全員が高度の影響の為苦しみ、C1を偵察できたのは隊員1人とシェルパだけだった。この尾根上C2(5,050m)予定地までは、放牧の為、雨期にはヤクが登ってくるとの事。実際C1にはカルカの跡があった。翌日は全員でC1を偵察し、中日を休養日として一気にアタックを狙う予定をたてた。B・Cから頂上までの標高差は3,000 m。ピラミッド型したピークは圧巻であったが、登頂できるものと誰もが感じとった。また今のところ天候もおだやかで、うまくすれば18名全員登頂することをもくろんだ。C1よりC2へ偵察に6名が出た翌朝、我々の甘い目論を吹き飛ばす猛烈な吹雪となって打消された。この吹雪は48時間続きC1テント3張、C2テント2張は完全に潰

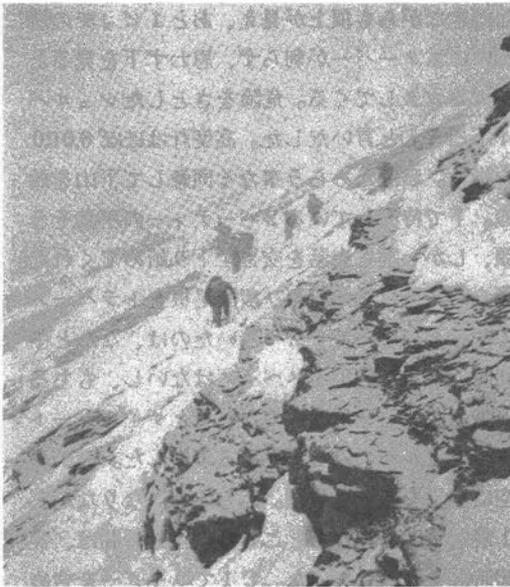
され使用不能となった。吹雪の最中偵察隊はさらにC2上部の偵察を終えC1へ着の身着のまま脱出して来た。彼らは寝袋のないまま氷点下25度の夜を潰されたテントで過した。12月31日午前2時、吹雪はうそのように去り、満天の星空に変わった。日程に限りのある我々の残された登山日数はあと2日。こんな事で下山するわけにはいかず、議論の結果、早くアタックを出す事になり、サポートを供ない11名で午前3時C2へ向う。草付のおだやかな尾根は一変して腰までのラッセルになる。約5時間でC2の台地に着く。まだ午前8時、このまま登り進めば今日アタックできそうな位置に岩尾根右前方にピラミッドは聳びえている。行けるとこまで行ってみよう元気ある5~6名で登り出す。やせ尾根を左へトラバースするが足場が悪く雪がある為、明日のアタックに備えフィックスロープを張りながらもくもくと進む。頂上ピラミッド直下の取付についたのは、午後3時を廻っていた。すでにビスケットとテルモスのお茶はなくなっていた。取付いてみると、このピラミッドの雪壁は思っていたより堅い氷で、上部へ行く程さらに堅さを増した。3パーティーに別れて私とシェルパはスノーバーを打ち、フィックスを張りながらトップで登る。睡眠不足と高山病、そして疲労のためシェルパと同じピッチで登るのは大変であった。私のアイゼンは他のメンバーのものである。靴にフィットせず非常に不安定で何度も

もたつきながらも頂上が見え、あと1ピッチの所でついにスノーバーが刺らず、思わず下を見ると足がガタガタしてくる。危険をさとしたシェルパは「下ろう」と言いだした。高度計はほぼ6,000mを指す。私はためらう事なく同意して下山を始める。下で待機している2パーティーの不満そうな顔、しかし誰も会話を交さず下り始めてくれた。午後5時30分だった。再び痩せ尾根をトラバースしてやっとの思いでC2へ着いたのは、なんと午後9時近かった。泊るスペースはないし、もちろん寝袋もなし、登頂意欲のない私とザイルパートナーのシェルパのみC1へ下る事にした。満天の夜空に流星を幾度も見た。ふらふらになりながらC1着22時30分。なんとこの日の行動時間は、実に20時間を経過していた。C1でリーダーを含め、残留メンバーに上部での出来事を報告する。さすがに心配していたリーダーはほっとしたようす。(通常のライトエクスペディションでは、トランシーバーは使用しない為キャンプ間のコミュニケーションは出来ない)

翌日は望遠レンズでアタックの様子を観察する。アタック隊は昨日と同じように雪壁へ取りつき登っているのが伺える。午後5時20分、ついにメンバー3人シェルパ2人登頂するのを確認した。なんと登頂したシェルパは昨日私と行動を共にし、C1へ帰着して再び今朝早くC2へ上り、アタック隊を追いかけて合流したのである。こういう体

登頂隊行動表

へりにて入山 12/23	3,200 BC	4,200 C1	5,050 C2	6,091 peak	天候
12/24	←				晴れ
12/25	←				"
12/26	休養				"
12/27	→				"
12/28		←			"
12/29		←			くもり→吹雪
12/30		停滞			吹雪
12/31			←		吹雪→晴
1/1			←		晴れ
1/2	←				雪→くもり

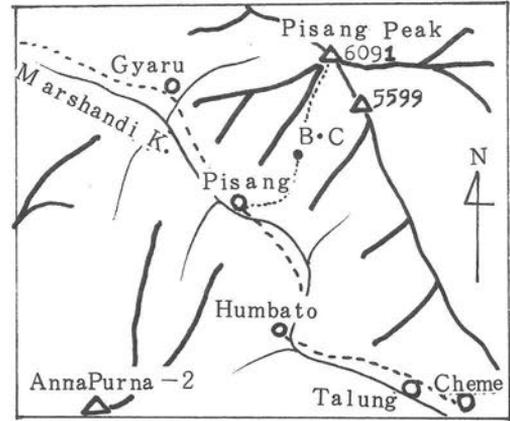


C2へのトラバースぎみののぼり

力はどういうトレーニングをすれば鍛える事が出来るのか、全くたまげてしまう。私はマネージメントの立場から登頂を確認後、明日のキャンプ撤収と帰りのキャラバンの為のポーター集めにB・Cへ下る。往路のヘリコプターの道を帰りは楽しい

トレッキングでB・Cから、ツァーメ、ダラパニ、シャンゲ、ブルグル、バグルンパニ、ガルプター、シスワ → ポカラ、ポカラ → カトマンズと各キャンプし、8日後にカトマンズへ着いた。途中バグルンパニの峠からのマナスル三山は、朝日、夕日に輝き、こんな見晴らしの好い峠はおそらくネパールで一番素晴らしい峠ではなかろうか。

概念図



インドヒマラヤを日本語で!!



UNITED TRAVEL SERVICE (P) Ltd.

- インドヒマラヤ全域のアレンジをすべて日本語でひきうけています。本社にも東京事務所にも日本語に堪能なスタッフが多勢おります。
- 許可取得から通関、隊荷輸送、ポーターアレン

ジまで、遠征・トレッキングのすべてを取り扱っております。

- 詳細は東京事務所のサニーまでお問合せ下さい。もちろん日本語で!!

東京事務所 〒141 東京都品川区西五反田2-23-11-202 電話 03-493-4920

本社 (デリー) 802 Nirmal Tower, 26 Barakhamba Road, New Delhi India  
Phone: 46107, 42804, 43984, Telex: ND3174 Cable : YOKOSO

## ネパール曼陀羅

高橋 照

ネパールに入って20年になるという。ネパールの裏表に関しては右に出る人はいないだろうといわれる高橋照さんがまた大変興味深い本を出した。

54年10月に出された「秘境ムスタン潜入記」で私たちはそのがい博な知識と経験・旺盛な行動力に驚嘆したものである。けれど、氏の蓄積からいえば「ムスタン」はまだ小出しの段階だったようである。

「ネパール曼陀羅」とはまことに言い得て妙な書名であると思う。「曼陀羅」マンダラは、サンسكريットのMandalaである。「Manda」は、「本質」、「La」は「得る」の意である。「少しでも実相に近いネパールを文字によって具現してみたいという願い」からこの書を表わしたという著書の学識の深さがこめられた書名である。

曼陀羅は、諸尊の悟りの世界を表現し、宇宙観、世界観を表現しているという。

カトマンズのホテルの庭の安楽イスに身をもたせて、瞑想してゆうゆうとやわらかな陽ざしをあびている氏の姿が思い浮ぶのである。

かつて、全日本岳連隊をひきいてビッグ・ホワイト・ピークに挑んで以来、ダウラギリ、マナスル、その他、次々にヒマラヤの巨峰に向かってきた照さんである。

今、その麓の世界において、本質に深くせまり、ある種の悟りに達したように私たちには思えるのである。

照（あきら）さんを私たちは親しみをこめて、「テルさん」と呼ばしてもらっている。時にアルコールを間にして明け方までも熱っぽくネパールを話す。知識は尽きることはないようで、次から次へと出てくるネパールの底深い話に、ただ、聴き入るばかりである。

こんな話が一冊の本になり、活字となっていつでも手もとにおけるのは全くありがたいことである。

ネパールに関するガイドブックや紹介ものはた

くさん出ている。つい先年にも出された。

ネパールを訪れる日本人は1万人以上にのぼっている。

先般、テルさんのお宅にうかがった折、それらにいっぱいの朱線がひかれていた。「こういうまちがったことを書いているんだからね」と嘆いていたものである。それらを訂す意味もこめて書かれたようである。

赤面する向きも多いのではなかろうか。

さて、手にしてまづ驚かされるのが極彩色の表紙の絵である。カーリー神の殺りく図である。けれど説明を読んで納得させられる。

話は別だが、マンダラと「タンカ」はよく混同される。タンカは、チベット、ネパールを中心とするラマ教文化圏で発達した掛け軸状の仏教絵画である。マンダラの表現のしかたの大部分がタンカによってできているためである。

マンダラはインドでつくられ、中国を経て日本にも伝えられた。インドにおいて理論的な組立てがなされ、それが国式化されたのである。

「カトマンドゥ四方山話」、「カトマンドゥ歳時記」と読み進めていくうちに、テルさんは全くネパールの人かと思ってしまう。行きずりの人間には絶対に書ける内容ではない。いわゆる「ネパール通」の人達でも頭をかかえこんでしまうような精細な考証と記録からなりたっている。

これだけのことを書けるのは、著者の執念ともいえるのめりこみだけでなく、一貫して流れるこの国への深い思いやりがあつてのことであろう。著者の蓄積からいえばまだまだこれは序の口と思われる。「いづれまた」と続編を期しているようである。早く出してもらいたいものである。

(い)

東京新聞出版局 昭和56年5月1日発行

A5判 316頁 1,500円

寸 感

▶ いつの間にか桜も終り、朝早く窓を開けると初夏の香りが漂ってまいります。

4月中旬、ネパール政府は新たなオープンビークを発表しました。その情報をいち早く皆様にお知らせするために、特集を組みいつもより若干発行が遅れました。

▶ 今月は実にめまぐるしい多忙な月でした。カンチ学術隊の出発、学術隊助成金の申請、etc.

会員の方の事務連絡や問合せなどに充分に対応できず、ご迷惑をおかけしております。

▶ カンチ登山隊の動きもいよいよ本番となり、この事務局も、活気のある、あわただしい動きを見せております。次号には、皆様に嬉しいお知らせができますことを確信して。

(緑川)

事務局日誌 (4月)

4月 5日(月) 札幌ヒマラヤ会議(稲田)

4月 8日(火) 第2次カンチ学術隊員出発  
(五百沢智也、松岡憲和)

4月13日(月) 事務局打合せ(稲田、細貝、緑川)

4月21日(火) " "

4月25日(土) 第3次カンチ学術隊出発(阿部)

ヒマラヤNo.115 (6月号)

昭和56年5月10日印刷 56年6月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 緑川 恭子

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1

淀橋食糧ビル506号

# Shikhar Travels

— シカール・トラベル —

## “魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン  
クル・マナリ・ラダック・ネパール.....  
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん!

当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、  
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



TRAVELS PRIVATE LIMITED

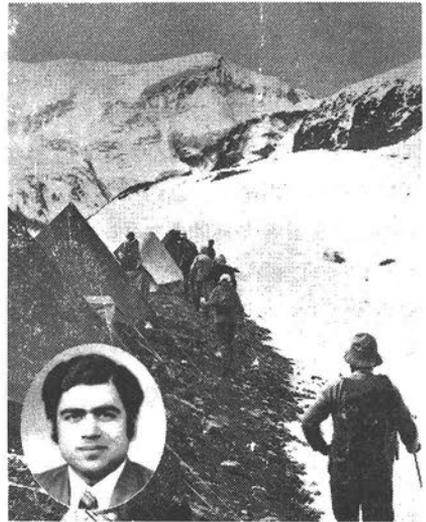
1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office:Gangtok

Camp office:Joshimath & Uttarkashi



CAPT SWADESH KUMAR  
(MANAGING DIRECTOR)

# ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



## ICI 石井スポーツ

至中野	至池袋	ICI山用品本店 ICIテニス用品 ICIスキー用品 本屋	至池袋
大久保駅	新大久保駅	大久保通り	明治通り
至新宿		ICIサッカー・野球用品	至新宿

- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208)6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル内 ☎03(200)7219

# 田淵行男 日本アルプスの蝶

美しき氷河期の後裔「高山蝶」を克明に記録した写真集！

日本アルプスの雄大な自然に息づく9種の高山蝶の生活史を克明に描く。山岳写真家、田淵行男氏が34年の歳月と尽きせぬ情熱を込めたライフワイクの集大成。

●1棲家について ●2タカネヒカゲ ●3ミヤマモンキチヨウ ●4タカネキマダラセリ ●5クモバネヒカゲ ●6ベニヒカゲ ●7オオイチモンジ ●8ミヤマシロチヨウ ●9クモマツマキチヨウ ●10コヒオドシ ●11結び  
●造本・体裁  
●A4変型判・綴装466頁・カラー1216頁・モノクロ136頁・解説104頁・収録写真カラー約400点・モノクロ約200点  
●定価 255,000円 好評発売中

## 田淵行男、雪形遍歴50年



「武田菱」  
北アルプス五龍岳

残雪が描く山の芸術  
「雪形」の豪華山岳写真集

〈ゆきがた〉

# 山の紋章 / 雪形

田淵行男

日本アルプスから、東北、北海道まで——  
山麓に春を告げる  
雪形約1300体、ここに集う。

■名著『日本アルプスの蝶』につぐ不朽の書

「高山蝶」が日本の山を飾る宝玉とすれば、早春の山に浮かぶ「雪形」はかけがえのない民族の伝承である。雄大なカメラワークと诗情溢れる名文で綴った山行50年の総決算。

■初めて集大成された雪形写真約3000点

安曇野、四ヶ庄平などから望見される信濃の雪形約50体を中心に、新潟、富山、山梨、群馬、岐阜などの隣接県、さらに東北、北海道まで取材し、可能な限り収録した貴重な写真集。後世に残る民族資料としての価値も高い。

■自然愛好家待望の雪形ガイドブック

旅行者や登山家の雪形探索に役だつイラストやスケッチ、連続写真、地図なども多用。雪形の魅力を十分に味わえる1冊である。

### 【内容構成】

- 第一章 ■雪形の季節
- 第二章 ■信濃雪形抄(1)安曇野の空に
- 第三章 ■信濃雪形抄(2)伊那・木曾ほか
- 第四章 ■雪形ニューフェイス
- 第五章 ■他県雪形点描
- 第六章 ■雪形補遺

### 【造本・体裁】

- A4変型判(290×220mm) / 布クロス装押し / ケース入り ●総頁322頁・4色108頁・1色52頁・解説152頁・その他10頁 ●収録写真(カラー1115点・モノクロ193点)

6月新発売

定価 18,000円